

回答 変化動向の捉え方

宮 沢 健 一

拙論「サービス化、情報化、ネットワーク化と産業社会」中の一点について、経済企画庁の加藤雅氏が批判を寄せられたことを歓迎し感謝したい。

ソフト化とは氏によれば、従来の産業構造論の枠外にあり一種の価値論の範疇に含まれるが、産業構造の変化に関係ないというわけではないとされ、概念化の意図が示された。小論の意図はもともと、機能的な概念化を軸とする産業社会の変化動向の把握に主眼がある。

したがって、変化の「原点はソフト化にある」との氏の捉え方に関連しては、小論中の次の論点を対置できよう。動向変化を促すものとして、工業化時代の「規模の経済性」の追求から、情報化時代の多角化の「範囲の経済性」追求へとシフトが生じているだけではなくて、情報ネットワーク時代には「連結の経済性」と名づくべき局面が開けている。それが、活動の投入と産出の両面における諸要素の「相対的価値」の変化を伴いながら、産業構造だけではなく産業組織にも影響を及ぼし、産業社会全般に変化を促している、とみる。

産業構造論レベルでの氏の指摘「物財産業のサービス投入誘発度合の上昇それ自身がソフト化の何よりの証拠」に関しては、次を指摘したい。つまりサービス化の変化動向の判定として、物↓サービスという上記の誘発ルート以外にも、サービス↓物、サービス↓サービスの内部誘発、といった諸ルートが併存し、それら誘発諸ルートの相対的な強度を、産業連関の分解分析手法によって評価し、識別することに拙論の力点がある。

また氏の指摘「これが物的部門内のサービス情報部門の外部化だけで生じているというのは正しくない」についても、小論では「だけ」とは言っておらず「を伴って」と書き、むしろ次

の性格を強調した。サービス情報の投入はゼネラル・インプットとしての特性をもつ。つまり技術的な、各産業に「固有な」投入とは違って、諸活動に「共通な」投入として機能し、財の「価値」を決めるものは、財そのものよりは財の属性であるという性格によって、情報媒介的な効果と帰結を各面に生み落している。

この種の機能論的な究明が、氏のいう価値論的な発想と連動して、問題を見る眼がいっそう深められていくことを期待したい。

(一橋大学教授)